

1月21日聴覚障害者向けDIGワークショップ相模原メモ

日時：2023年1月21日 13時30分～16時

場所：相模原市立あじさい会館6階

主催：クローバーの会 学習会 協力 さがみはら防災マイスター

テーマ：家の周りの危険を知ろう

集合環境：手話による説明、発言記録をパソコンに文字化、プロジェクターに映像化

受講者：手話25名、筆談6名

スタッフ：防災マイスター6名、手話通訳者12名、要約筆記者8名、板書担当8名
事務局等数名 合計約60名

特別参加者：防災塾・だるま 田中喜世美・田中晃 神奈川新聞 渡辺記者 記録：田中晃

追加資料：神奈川新聞2月6日 相模原で図上訓練「聴覚障害 自助と配慮」

1. ワークショップの説明 相模原「防災マイスター」応急手当普及員 小島 洋

- ・団体の協力と会員の熱意で研修ができたが、準備に2年かかった。
- ・DIGの目的と進め方の説明があった。6グループに分かれ、指示書により作業を行う。

2. 手話団体「クローバーの会」木村氏挨拶

- ・市内協会や手話通訳者等4団体合同の活動で、防災マイスターの協力で開催できた。

3. DIGの実施

(1) 会場設営

- ・相模原市の地域別に6グループを編成。隣接グループとの境を白板で仕切った。
- ・正面に2面のスクリーンを置き、パソコンから指示書や留意事項を表示。
- ・資料・説明用資料（机の上）ハザードマップはグループ員が見えるよう壁面に張った。
- ・放送と映像の「指示書」により順次作業を実施した。

(2) 指示書

指示書1：自己紹介、進行役と発表者、家の場所に白色の付箋

指示書2：地図に色を。川・湖・池、道路、鉄道、田んぼ・畑

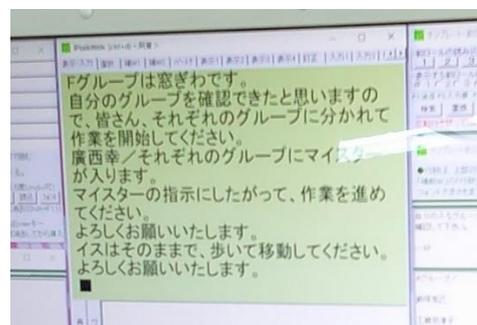
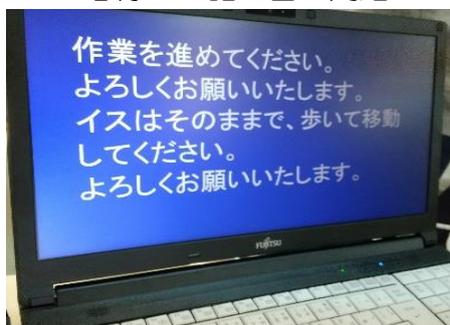
指示書3：シールを張る。消防署、市役所、区役所、病院、避難所等

指示書4：危険な場所に色、災害が起きそうな場所—浸水、がけ崩れや地滑り

指示書5：避難所、道の確認、危険と思う場所に付箋、ブロック塀も危険

指示書6：雪が5cm、大雪注意報、震度6弱の地震、電気ガス停止

想像して話し合い開始



(3) 各班の進行概要

- 各地域のハザードマップを壁に張り、話し合った結果を書き入れながら意見交換した。
- 難聴者の課題は「火災の音が聞こえない。」「火事だ！の声も聞こえない。」「聞こえないので不安になる」ことを理解した。
- 「人は守ってくれない。」との意見もあった。
- 難聴者は「地震が来たら来てくださいと自治会や管理組合に言う。」「努力はしよう」
- 備蓄品等は3か月ごとに調べたら、との意見もあった。
- 白板の記入内容は各グループの特徴が出ていた。



(4) 各グループの活動結果発表

- DIG 作成に当たって
住んでいる地区の情報の交換が行われていた。会話による理解から始まった。
- 自分で気を付ける事項は、普段から「聞こえません」と言うこと。
- 注意事項も、避難所より自宅にいるのが良い、一人で動かないこと、すぐ動かないこと、ポータブル発電機の準備、冬の懐炉等、我々も参考になった。
- 自分の活動—防災を語るひとが各グループにいた。

*一般事項は省略



(5) 意見交換での参考になった事項

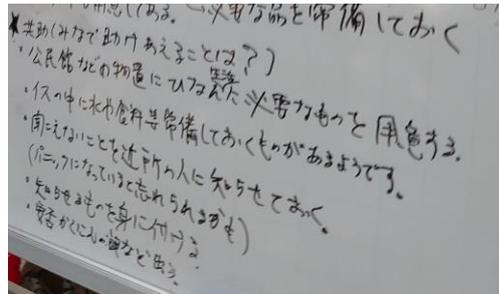
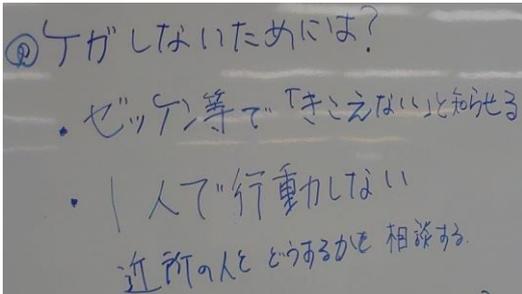
(1) 総括

- 1時間の意見交換では、各グループ熱心に行っていた。
- 各グループには防災マイスターが1名入った、防災に強い参加者もいたようだ。
- まとめ方はそれぞれが行っていた。

自助、共助、家の中で注意している事項、地震起きたときどうする、けがをしないためには、夜寝ているときはどうするか、など

(2) 不安事項

- 情報を得る方法は ・川の氾濫が心配だ。
- 避難所には手話ができる人はいない。高齢者の手話は難しい。
- 家具が倒れる恐れのあるものがある。 ・火事ではどうする。
- プロパンガス、地域の医者等の意見交換が行われていた。
- はじめて知った事項：風水害の避難所、救護所、コンビニで情報収集など



(3) 非常時の対応

- 聞こえないことを近所の人に伝えておく。自治会管理組合に伝える。
- ご近所・ご家族に来てもらう。・近所とのコミュニケーションを親戚に連絡
- 知らせるものを身に着ける。玄関に用意。書いても通じないことある。
- 積極的に周囲に関わっていく。

(4) 準備することの事例抜粋

- テント、1年に1回避難袋を確認、
- 1人で行動しない。
- ゼッケンで「聞こえない」と知らせる
- 訓練は必要



(5) 情報網の意見交換

- Net119 緊急通報システム、メール119の話題も出た。
- 聞こえない人の情報網が不足している。どこにあるか事前に周知してほしい。
- パンフレットを置いてほしい。通訳の場所もお願いしたい。
- 放送に合わせ、スクリーンで表示してほしい。

4. 講座で役立つ留意点

- 10人程度の共生活動と、どうしても必要な個別活動の組み合わせが大事だ。
- しゃべりと手話の連携・情報共有が第一だ。映像による指示事項もモデルになる。
- グループから外れる人もおらず、各人の活動は真剣であった。会員の事前準備の成果だ。
- 記録化し、映像に映すのも共有化できた。
- 意見交換しまとめるのに1時間をかけた。本音の意見交換は時間がかかる。
- 反省事項はダルマの「名札が必要」であった。



<「防災塾・だるま」参加者の感想>

① 自分たちにできること、何ができるかを皆さんが真剣に考え、議論なさっていました。今回は避難をするための地域の状況の把握や、地域を知ることが主題のように思います。スカーフの使い方、ビブスの使い方。今回はお試しということでしたが、分かりやすくて良かった。

日頃から、自分に何があると便利かを考えて、暗がりのときにすぐに必要な、懐中電灯・上履き・軍手・笛などを袋に入れた枕元セットのようなものを、すぐ手が届く場所などに置いておくと便利です。蛍光塗料のついたシールを携帯電話に張っておくと薄ぼんやりの光の中でもなんとか見えます。ほかに、マジックで大きく字を書いて外に知らせるための大き目の用紙もあると便利かと思います。孤立したときに、自分の居場所を外に知らせる方法を考えることも大切。

私は、健常者！ということではなくて、明日は我が身！そのことを考えると、他人事とは思えません。私たちも、もっと真剣に考えなければと・・・

DIG+J-DAGの指示書のパターンは参考になった。

(田中喜世美)

②相模原マイスターの方々と参加者が伸び伸びと真剣に取り組んだ訓練は、参考になった、が感想です。災害時要援護者が災害にあった時、自助の力を活用し、個別の支援計画を作らないとスムーズな支援に繋がらない。背景には人のつながりの強弱が決め手だ。

今回、手話の参加者24名、筆談参加者6名に、身近な手話通訳者、筆談できる要約筆記者、さらに板垣担当をつけて、ほぼ1：1の関係で事に当たることができた。論議に加われない方もおらず、集団活動に一人ひとりの対応も含めながら論議していました。

寄り添う人の技術レベルもあろうが、本人たちの行動も前向きで、たくさんの感想があり、これが安全・安心となる原因につながると思います。

今回の共通認識は、「絆」に繋がっていく普段のつながりであると思いました。

防災も福祉も人間同士1：1の関係で、その信頼関係が見えたのが良かった。

活動団体と専門家、市民との共生社会に向かって第1歩を踏み出した事例とされます。相模原市の地域のつながりの継続と充実を期待しています。

(田中晃)

以上

追加資料：神奈川新聞2月6日 相模原で図上訓練「聴覚障害 自助と配慮」